

2026年(令和8年)4月4日発行

No. 21

公益社団法人日本山岳会山形支部
支部長 鈴木理夫
事務局 〒999-7631
鶴岡市八色木字西野 62 日向稔也方
Mail ymg-info@jacmember.com
編集 河口昭俊



目次

1	支部長あいさつ	No.11637	鈴木理夫	P. 1
2	新会員・会友紹介	No.17160	松本賀都子	P. 3
		No.17614	鹿野 実	P. 3
3	今年度の活動報告			
	月山春スキー	No.11432	誉田紘八朗	P. 4
	山小舎探訪	No.16876	酒井眞澄	P. 5
	東北・北海道地区集会	No.15526	武田幹男	P. 6
	それぞれの白馬	No.11637	鈴木理夫	P. 11
		No.17125	丹野浩之	P. 12
	清掃登山・芋煮会・害虫被害調査			
		No.16462	日向稔也	P. 13
	蔵王地蔵山害虫被害調査報告			
		No.15137	野堀嘉裕	P. 14
	宮城支部との交流会	No.16798	沼部ひろみ	P. 15
	それぞれの上高地	No.15785	佐藤一広	P. 16
	支部晚餐会	No. 9595	粕谷俊矩	P. 18
	樹氷原を滑る会	No.17160	松本賀都子	P. 20
4	追悼 故前田直己会員	No.15137	野堀嘉裕	P. 21
5	特別寄稿			
	雲南紀行	No. 7734	木村喜代志	P. 22
6	山形支部活動記録 事務局			P. 29
7	支部会員の活動記録 事務局			P. 30

2025年は山形支部創立75周年でした
鈴木支部長創作ロゴ →



支部長あいさつ

会員番号 11637 鈴木理夫

1905年に設立された日本山岳会は2025年に設立120周年を迎えました。12月6日に開催された記念講演・記念式典・記念晩餐会には多数の会員が出席し、改めて日本山岳会の組織と歩んできた歴史を振り返る機会となりました。今年度創立された東京支部を加えて全国に34の支部が存在します。必ずしも各都道府県に支部が設置されていないので、単純な比較はできないかもしれませんが、令和7年6月の本部総会資料によれば山形支部の支部員数は少ない方から六番目になっています。最低でも現在の支部会員数を維持しながら支部活動を継続していくことが重要になります。



山形支部にとっても2025年は創立75周年となる記念すべき年になりました。1950年4月に設立された歴史ある山形支部は、2030年に創立80周年を迎えました。支部活動は日本山岳会の土台となり基本となるものです。我々自身、日本山岳会に属しているよりは、山形支部に属している意識の方が強いと思います。山形支部は規模が小さいながらも、「学校から見える山」など独自性のある事業などを含め活発な活動を行っていることが評価されています。創立80周年に向け、個々の支部活動を一層充実させていきたいと思います。本部晩餐会の席で、来賓の駐日英国大使の日本語によるご祝辞がありました。両国の山を通じた交流の歴史を踏まえた素晴らしい内容でした。その中に次のような一節がありました。「山は私たちに、自然への敬意、人々のつながり、そして困難に立ち向かう強さを教えてくれる。」山形支部も恵まれた自然環境に敬意を払いつつ、支部会員相互のつながりにより困難に立ち向かいたいと考えています。ご協力の程お願いいたします。私が今年自然への敬意を最も感じたのは、7月の昭和神山への登山でした。北海道支部のご厚意で特別の許可を得て登らせていただいた昭和神山は、まだ大地が熱く場所により水蒸気が上がり周囲の噴火による被害状況も含め、自然への畏敬や地球の息遣いを感じさせる火山で貴重な体験となりました。

12月に選ばれた「今年の漢字」は「熊」でしたが、熊の出没が過去最高を記録するなど日常茶飯事となり、山間部のみならず特に中心市街地への出没、本来なら冬眠している冬期間まで目撃されることも珍しくなくなりました。私の自宅（新幹線の止まる駅から徒歩4分ぐらいですが）近辺200メートル以内にも、複数回熊の出没がありました。北海道の羅臼岳で下山途中登山者がヒグマに襲われ命を落とした事件は衝撃的でした。東北の他県でもツキノワグマによって、人の生命が奪われる痛ましい事件がありました。このような状況の中、登山に関しても熊対策が必須となってきています。個体数の増加、人との距離を取らない熊の出現、耕作放棄地の増加による活動エリアの拡大、人里の食

べ物の味を覚え冬眠しない熊、親熊がいない子熊の単独行動など以前の常識が当てはまらなくなりつつあります。ただ、ある程度標高のある山中の状況は、あまり大きな変化がないというのが実感です。登山では熊と人間が適度な距離を保ちお互いを避けるため、音等により人の存在を示すことはこれからも重要な点です。

最後になりますが、昨年 12 月の本部記念式典にて田宮良一会員が新永年会員となる表彰が行われました。改めてお祝いすると共に、日本山岳会の活動に対する半世紀に渡るご貢献を称え支部長のあいさつといたします。



本部晩餐会 田宮良一永年会員と

新会員・新会友紹介

会員番号 17160 松本賀都子（東京多摩支部）

「遠い大分県の国東半島でご縁をいただき、山形支部の会友となりました」

2025年4月、120周年古道調査PTが主催する「国東半島峯道ロングトレイル」に参加した時に、何とも不思議なご縁をいただきました。そのご縁を下さったのが、山形支部から参加された武田さんをご友人の鹿野さん（鹿野さんは後に支部正会員となりました）でした。



どんなご縁かという、（行きと帰り）二度もお二人とバス停で出会ったというご縁です。特に帰りのバス停での出会いは「うっそでしょ～！！」としか言いようのない不思議な出来事でした。「これはもう山形支部がわたしを呼んでいるに違いない！」と思い込んだわたしは、その後「それぞれの上高地」と「樹氷原を滑る会」に参加させていただき今に至っています。

住まいは東京都の武蔵野市というところで、自宅の窓からは南西方向に富士山が遠望できます。本格的に登山を始めたのが2011年の秋ですから、山歴はまだ14年程しか経っていません。まだまだ知らない山が沢山あるので、山形支部のみなさんとこれからひとつひとつ知らない山を楽しん行きたいと思っています。どうぞよろしく願います。

会員番号 17614 鹿野 実（カノミノル）

リタイア後、馬見ヶ崎川河川敷の散歩を日課とする。西方面に向かえば月山、葉山、東方面に戻ってくれば瀧山、熊野岳、雁戸山が前方に見え、登ってみたいと思うようになり、登山開始。

2016年 清川月山会に入会

2021年 寒河江山岳会に入会 武田幹男氏と知り合う。

山形支部主催の「それぞれの上高地」に2023年、2024年参加。

本部主催の山岳古道集中山行・国東半島に2025年参加しました。今後、よろしく願いいたします。



中国雲南省にて

月山春スキー

会員番号 11432 誉田紘八朗

参加者：粕谷俊矩、鈴木理夫、小林政志、野堀嘉裕、野堀将樹（ゲスト）、日向稔也、結城敏宏、誉田紘八朗（8名）

今年の「月山春スキー」は2025年4月19日（土）に行なわれました。快晴です。朝9時、志津野営場駐車場に集合後、町営バスで姥沢駐車場へ移動。今年は雪が多く、雪道をスキーを担いでリフト下駅迄15分ほど歩きました。コースは、粕谷さんが三つの案を提示して、相談の結果、「リフト上駅から姥が岳に登り（約30分）、スキー場大斜面コースの途中から石跳川に下り、ネイチャーセンターを經由して野営場バス停に滑り込む。（石跳川の下流部に出るので雪崩の危険はない。）」に決定した。

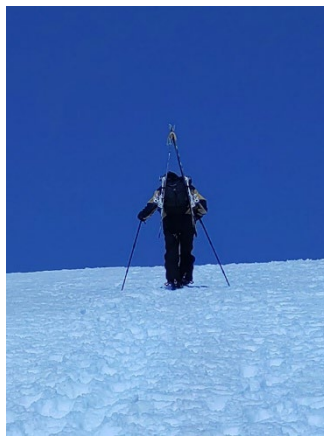
リフト上駅を10時40分出発。6名はスキーを担いで、2名はシールを付けて、一面真っ白の大斜面を姥が岳に登る。山頂で20分休憩。360度、朝日連峰、鳥海山、雪山の絶景に感動する。11時40分、粕谷さんのリードで大斜面を大きなスラロームを描いて滑降。途中、全員の滑降を動画に撮りました。（余裕ですね。）皆さんスキーが上手いです。石跳川に下りる森林帯の上部で昼食。12時40分、再び粕谷さんのリードで森林帯を滑降。（私は、ひたすら粕谷さんのシュプールを辿って滑る。）最後は石跳川に沿って、トラバース気味に森林帯を抜けて志津野営場駐車場迄、一気に滑りました。13時5分到着。無事に下山し、粕谷さん持参のコーヒーで乾杯。晴天に恵まれ楽しい山行が出来ました。



志津野営場駐車場に集合。快晴です



NM君はシール登高を楽しんでいます



TH氏は青空を背景にスキーを背負って雪山をダイナミックな登りです



姥が岳山頂で集合写真撮影です
背景は月山山頂です

山小舎探訪～鳥海山 TDK 小屋（東雲荘）

会員番号 16876 酒井眞澄

期 日 2025年6月21日（土）～22日（日）

参加者 木村喜代志・粕谷俊矩・鈴木理夫・瀬川昭・河口昭俊・武田幹夫・

日向稔也・小林政志・佐藤一広・安井康夫・杉田和美・佐藤映子（22日のみ）

今年で2回目という山小舎探訪に参加させていただいた。

始め TDK 小屋とは何だろうと思っていた。あのカセットテープの会社と関係あるのだろうかと思ったらあるとのこと。昔の保養所だったらしい。標高も高い（1169m）のでとても涼しかった。6月なのに下界はどこもとても暑かった。部屋にはたくさんの花や歴代の関係者の写真が飾られていて歴史を感じた。今は誰でも予約すれば泊まれるとのこと。電気もガスも台所、炊事道具もあるし広い部屋が2つとはなれの部屋もあった。別料金がかかるものの布団も貸し出し可能とのことであった。私たちは駐車場から5分くらいなのでシュラフやマットを持参した。昔はお風呂も使えたそうだ。難点は水だろうか。水は管理人さんによって大きなペットボトルに用意されてはいたが人数が多いと足りなくなってしまう。冷蔵庫はなかったのでスコップを持って雪渓まで雪を取りに行きビールや酒を冷やした。外に出て梯子を上ると屋根の上が展望台になっておりちょうどガスが出ていて眺望はよくなかったが晴れていれば素晴らしい景色が望めそうだった。

1日目夕、2日目朝とも木村喜代志シェフ監修の美味しい料理の数々を頂きながら楽しい



サモサ

話に花が咲いた。特にサモサは絶品で皆で包むのをお手伝いしたりして、出来上がりを頂いたときは美味しさにビックリ。余談になるが私は帰ってからレシピを送っていただき何回かつくった。スパイシーでインド料理屋さんみたいな匂いがすると家族にも大好評であった。

山小屋での夕餉を囲みながらの話は、河口事務局長へ戒名の値段を聞いたり、誰かは墓を用意したという話だったり「それぞれの老後だね」みたいな話で盛り上がり酒もすすみ夜は更けていった。



前述したように大きなペットボトルも用意されてはいたが私達は2日目朝に水が足りなくなって駐車場まで汲みに行った。その時になんか放送が聞こえているなあと思ったら駐車場近くで熊の目撃情報があり注意喚起の放送だった。パトカーも巡回していたらしい。

翌日は賽の河原、鳥海湖あたりまで登る予定であったが天気予報が雨ということで残念だったが諦めて早朝の解散になった。というわけで今回は山小屋での宴会の話になってしまったがとても便利な場所にあり、鳥海山登山の計画に、避暑に是非お勧めしたい山小屋だと思った。

北海道支部 60 周年記念兼第 38 回東北・北海道地区交流集会

in 洞爺湖有珠山ジオパーク 2025. 7. 11~12

会員番号 15526 武田幹男

□参加メンバー：鈴木理央、沼部貞治、沼部ひろみ、杉田和美（会友）、武田幹男

□11 日：記念講演と噴火による災害遺構場所の見学

洞爺湖温泉の女将の河南美恵子氏（火山マイスター）による《有珠山とともに生きる一火山との共生が教えてくれたこと》の記念講演がありました。

有珠山のすぐ麓には、約 1 万年前から人が暮らしており、住民はどのように火山と共存してきたかのお話がありました。有珠山の火山活動の恩恵は、火山灰でできた良好な耕作地帯や果樹園、1910 年の噴火がもとで誕生した温泉そして火山が作った素晴らしいカデルラ湖の景観等があります。これらは、ユネスコ世界ジオパーク認定地として北海道有数の温泉観光地になっております。こんなに火山に近い場所なのに共存できる理由は、《マグマがゆっくり上昇する便秘型のスローな火山活動》であることで、避難・安全対策の予知がしやすい状況にあり、そのことが大きな要因であることを教わりました。2000 年に河南氏自身の宿も噴火の災害にあっており、“火山とともに共生する住人”の立場として火山防災・減災の意義をマスコミ等で発信しておられます。このことで私のこれまでの火山の危険性の概念が、大きく変えられました。

講演終了後、噴火による災害遺構場所として《町民温泉施設や市営住宅及び流された橋等》を見学し、自然災害のすさまじさを改めて認識しました。



町民温泉施設跡地



市営住宅跡地(1 階は地下)

□12 日：昭和新山 398m（1943~45 年噴火）交流登山と三松正夫記念館見学

行程：洞爺湖ホテル 8：40➡昭和新山登山口 9：00➡亀岩➡昭和新山山頂➡亀岩➡
昭和新山登山口 12:40➡三松正夫記念館見学➡山麓駐車場 13：10➡
洞爺湖観光ホテル 13：25(解散)

昭和新山は、山全体が特別天然記念物に指定されており、個人所有の山となっています。従って、特別の許可がなければ登ることのできない山です。今回は、昭和新山の所有者の三松氏（火山マイスター）の案内をいただき、めったにない貴重な山登りの体験をいたしました。

昭和新山は、中腹から草木が無くなり、山の表面は生暖かく、直下の内部は100度程度の温度で所々水蒸気が噴出しております。この温度は、蒸し料理にとっても適した場所です。事前に案内がありましたので、蒸し料理に適した食材を多くの参加者が持参して賞味しました。私もジャガイモやトウモロコシなどの食材を持参すれば良かったなと後悔しました。沼部さんから頂いたサラミの蒸し料理は、とても美味しかったです。

登山道で斜めの滑りやすい危険な通路が2か所ありましたが、その場所にスタッフ3人で両手を広げて通路より低い場所に注意喚起をしていただきましたが、万一滑ったらスタッフを巻き込んで一緒に落下するのではと感じました。（実は、先月に月山清川小屋へ本道寺から登った時に通常の登山道が土砂崩れで流され、直登に近い危険な迂回路を通った時に掴んでいた枝が切れて2m滑ってしまいました。相棒を巻き込む危険な目に合ったばかりなので、その時のことを思い出しました）

NHK 教養バラエティー番組プラタモリで登山の様子を放映されたそうです。一緒に登った女子アナが、ころがっている赤い石の種類を質問され“レンガ”と回答し、正解したそうです。（私は、わかりませんでした）

活火山の生きている姿を間近に見てとても地球の不思議を肌で感じ、また山頂からの洞爺湖からの絶景を見ることができてとても満足しました。

下山後、三松正夫記念館を見学しました。郵便局長だった三松正夫さんが、麦畑が徐々に隆起していく状態を見て、《噴火は地球の内部を探る最大のチャンス》と捉え最初から最後まで毎日スケッチと測量と記録を続け、火山の成長する姿を危険を顧みず命がけで作成した資料を閲覧しました。また、三松正夫さんは、家族の猛反対にもかかわらず新山の場所を全財産を投げうって購入し、外部からの侵入者の掘削による地形の変形を危惧し、我が子のような思いで保護したとの事です。やはり、歴史に残る明治の人は、すごいなとつくづく感心しました。このことは、戦時中なので不吉な現象として世の中には一切報道されなかったことも知りました。

参考：三松正夫の略歴 明治21年生まれ昭和52年没。明治37年～45年まで絵描き志望だったが、夢かかなわず郵便局員となる。明治45年有珠山噴火を体験し、来訪した大森東大教授の下、地学・火山に開眼。昭和18年～20年昭和新山の寝食を忘れて調査し記録。昭和21年昭和新山生成地を買い取り、天然記念物指定を申請し、その保護に努める。昭和23年オスロ万国火山会議でミマツダイヤグラムと命名され絶賛される（受賞：北海道文化賞、勲5等瑞宝賞、吉川英治賞、国立公園功労賞、北海道文化財保護功労賞三松正夫記念館。壮瞥町名誉町民等）



蒸し焼き料理の場所



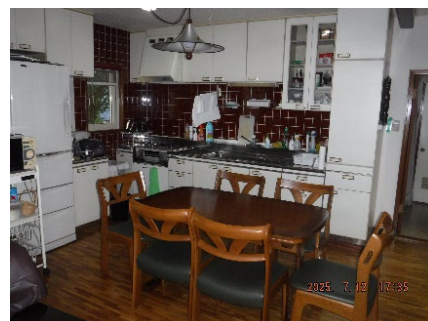
□13日：ルーム白石（北海道支部集会所）

北海道支部の黒川支部長の計らいでルーム白石（1戸建）に1500円/人で泊まることができました（札幌のルーム白石まで車で送っていただきました）。とても快適で応接間、打合せルーム、台所、風呂、図書室付きのルーム白石です（街の中に位置し、隣のスポーツショップ秀岳荘様の無償貸与とのこと）。

北海道支部は、今年で60周年になり、記念行事も東北・北海道地区集会と一緒に催されました。おめでとうございます。「支部60年のあゆみ」に記載されていた記事で、印象に残った下記の文章があります。年報「ヌブリ」1号(1971年)に掲載された中野征起氏の記述で《山登りは元来個人の自主性が尊ばれるべきであり、百人百様の考え方があるべきである。集会の山の雰囲気を楽しむ人、近郊の山歩きに浩然の気を養う人、そして。垂直の壁に最新技術を競うのもよかろう。支部は、そういった人の集まりである》の考え方は、今も支部活動に継承されています。

また、支部活動で《子供サマーキャンプ》という小・中学生の子供たちに3泊4日のキャンプや登山、ツリークライミングなどの自然体験の場を提供する、素晴らしい公益活動があります。山形支部の《学校から見える山のイラストプレゼント》活動と通じるものを感じました。

一緒に泊まった岩手支部の阿部支部長ら3人と夕食と美味しいお酒をいただきながら、支部活動の意見交換をしました。特に10年連続支部長を務めている阿部支部長(女性)の活動の話が興味深かった。地元のラジオ放送で12年間、里山紹介の活動をしているとのこと。紹介するには、必ず自分で登ること、文献を調べることで、紹介する文章の作成の3点セットが必要なので、結構大変だが反応もありやりがいがあるとのことでした。どこの支部にも、逸材がいるものです。



□14日：鈴木支部長と一緒に観光

巡った観光地：函館山、金森赤レンガ倉庫、青函連絡船摩周丸、五稜郭 他

函館の町は、学生時代に過した横浜の街に似た建物が多く雰囲気もそっくりで、とても親しみやすい素敵な街でした。私が、特に印象に残ったのは、金森赤レンガ倉庫と五稜郭です。五稜郭は、幕末の日米和親条約により下田と箱館が開港され、その奉行所として西洋式の城郭が設置されましたが、ここを舞台にした明治維新の箱館戦争で多くの人材が失われました。詳しく管内の資料を見て廻ると、世の中を動かすため命がけで活躍した優秀な人材が多くいたことに、改めて気付かされました。城郭設計者の武田斐三郎、榎本武揚、大島圭介、新井郁之助、土方歳三など偉人と、令和の口先だけの政治家と“器の大きさ”や“志の高さ”をつい比較してしまいます…。

海鮮市場での食事は、すべて美味しく特にホッケやイカが美味しかった。ウニも食べたかったのですが、ポイント稼ぎのため妻にお土産にすることにしました。(笑)ちょっと気になったのが、南陽という大粒の美味しそうなサクランボが並べてあったことです。いずれ、寒河江から北海道に移ってしまうのかな……。

最後に、今回すべての企画でお世話になった鈴木支部長に感謝いたします。(完)



摩周丸船内



赤レンガ倉庫



函館山の眺望



教会地域



五稜郭



五稜郭内奉行所

“第2回” それぞれの白馬

会員番号 11637 鈴木 理夫

期日：2025年7月28日(月)～30日(水)2泊3日 宿泊：立教山荘(長野県小谷村蕨平)
参加者：鈴木理夫、沼部貞治・ひろみ、結城敏宏、酒井眞澄(八方尾根～唐松コース)
丹野浩之、武田幹男、河口昭俊、日向稔也(大雪溪～白馬コース)

昨年は土砂降りに近い天候で、予定通りに登れなかった「それぞれの白馬」であるが、今回は天候にも恵まれ、後立山連峰を十分に楽しみ責任者として安堵することができた。米沢と鶴岡に分れてそれぞれ出発する。鶴岡発のグループは丹野さんのワンボックスカーに乗りこみ、順調に立教山荘に到着した。日向さんは親戚宅に寄る関係で単独で運転し無事到着。初めての方もいるが、昨年宿泊した方も多くすべてがスムーズに進んでいく。私の大学時代の先輩から聞いていたが、トイレが洗浄機能付温水便座に交換され、また今回は使用しなかったがシャワーも設置されていた。周辺の草刈りも含めて先輩たちのご尽力に深く感謝する。夜はにぎやかに楽しい時間を過ごす。

＜唐松岳＞ 八方ゴンドラ・リフト→八方池→丸山ケルン→唐松岳山頂→帰路同じ

翌朝白馬組が出発した後に、沼部車と酒井車に分乗し八方尾根のゴンドラ乗場に向う。少し離れた無料の駐車場と乗場付近の有料駐車場があり少し手間取るが、天気はまずまず良好で大学時代以来となる唐松岳に登る意欲が湧いてくる。歩き始めて少しすると、白馬組より連絡があり、詳しい状況は白馬大雪溪組の記事に譲ることにする。八方尾根は展望に恵まれているので、携帯の電波は問題ないと思っていたが、通信事情が不良で状況の把握に手間取る。とりあえずこちらは登り続け、丸山ケルン付近で沼部夫妻と別れ唐松岳を目指す。豪雪の影響で途中の雪溪も大きく冷気で少し癒される。唐松に近づきつつある途中からそれぞれのペースで頂上を目指すことにした。前回登ったのが40数年前のことで、唐松岳頂上山荘は当然ながら新しくなっているが、谷底に降りていくような幕営地は変わっていない。比較的上部に幕営したことを思い出した。あの時は針の木～白馬を経て梅海新道経由で途中の暑さに閉口しながらも、日本海の「親不知」へ下り海で泳ぎ気分爽快だった。それを思えば山荘から唐松岳頂上なんてすぐだと思っていたら、今更ながら自分の年齢を実感し結構な疲労感を感じながら頂上に到着。雲はやや多いものの、まずまず展望も良好で楽しむことができた。頂上山荘で結城さん、酒井さんと合流し下山する。頂上山荘のトイレは協力金300円であったが、昔は協力金がなかったし、トイレは小屋の外にあった気がするが定かではない。現在は靴を脱いで小屋の中に入る必要がある。八方尾根は遅い時間になっても結構登ってくる人がいる。この先大丈夫なのかと思うような人もまれに見かける。遭難が時々生じるのも、むべなるかな。八方池で雲が切れるのを待つが、残念ながらすっきりとして景観にはならなかった。沼部夫妻と合流し立教山荘に戻り二日目の夜を過ごす



した。最終日の朝に米沢組が出発し、白馬組が山荘に戻るまで時間があり、窓の棧など普段あまり掃除をしないところを、小舎に感謝しながらきれいにして帰路についた。

〈大雪溪から白馬岳へ〉

会員番号 17125 丹野浩之

それぞれの白馬の2日目、早朝から白馬岳を目指して動き始めた。立教山荘～八方バスターミナルは車で移動、そこからタクシーにて猿倉へ、そして猿倉山荘よりいよいよ登山開始。管理用道路と登山道入り交じりながら進んでいく。白馬尻小屋を経て大雪溪へ踏み込むと、周囲の空気は一変する。白く広がる雪の谷は数多くの登山者が歩みを進めているが、辺りは静まり返り、足元でアイゼンが雪を噛む音だけが規則正しく響いた。冷気が頬を撫でる一方で、強い陽射しが容赦なく体力を奪う。照り返しに目を細めながら、一步一步、黙々と高度を上げていった。



その静寂を破ったのは、突然の落石の音だった。カン、という乾いた衝撃音が谷にこだまする。緊張が走る。見上げると、岩が跳ねるように飛んで来るのが見えた。その日だけで落石は五度。自然の山では珍しいことではないと頭では理解していても、実際に音を聞くたびに心臓が強く脈打った。なかでも一度は、明らかに自分へ向かって来る石があった。視界の端に影を捉えた瞬間、反射的に身をかわそうとするが、どちらへ飛んでいくのか見当がつかず身動きが取れなかった。幸い我々の数十メートル手前で雪面に突き刺さり事無きを得た。

さらに衝撃的だったのは、2メートルほどもある大きな岩が登山道を横切った瞬間だ。重々しい音とともに土煙が上がり、その質量に圧倒された。もし数分通るのがずれていたらと思うと、背筋が冷える。雄大な景色の裏に潜む厳しさを、私は身をもって知った。出発前に鈴木支部長より伺っていた“上を向いて歩こう、上を向いて休もう”という言葉が思い出された瞬間でもあった。

呼吸を整え、同行した会友2名と「あだなぶつかったらひとたまりもないぞねえ」と言いながら進む。やがて雪溪を抜け、岩場を越え、視界が大きく開けた。山小屋へ荷物をおろし、夕刻、ついに白馬岳の頂に立つ。360度に広がり、幾重にも連なる山並み。先ほどまでの緊張が嘘のように、心が解き放たれていく。自然の厳しさと美しさは、表裏一体なのだと実感した。

山頂の小屋に戻り、汗で乾ききった身体に、冷えたビールを流し込む。喉を通る炭酸の刺激、体内に広がるほろ苦さ。あの一杯は、これまで飲んだどんな酒よりも美味かった。落石の恐怖を乗り越え、無事に辿り着いた安堵と達成感が、味を何倍にもしていたのだろう。

最終日、名残を惜しみつつ下山する。振り返ると、白馬の峰は静かに空へ溶け込んでいた。早朝のためか、落石も無く安全に下山する事ができた。麓の温泉で汗を流し、立教山荘にて皆さんと合流。帰り道で白馬の出来事を何度も思い返す。落石の緊張、暮れゆく時の山頂の静寂、そしてあの一杯のビール。会友と歩いた山の時間は、私の中に深く刻まれ、忘れがたい夏の記憶となった。

公益清掃登山・芋煮会・蔵王害虫被害調査

会員番号 16462 日向稔也

期 日 2025年8月30日(土・日)

場 所 蔵王の山形山岳会山小屋

参加者 木村喜代志、鈴木理夫、梅本幸巳、野堀嘉裕、河口昭俊、武田幹男、佐藤一広、日向稔也、沼部貞治、沼部ひろみ、結城敏宏、佐藤明、小林政志(13名)

例年この時期に清掃登山と芋煮会をセットで行ってきましたが、今年度はそれに害虫調査被害が加わりました。盛りだくさんです。当初、害虫被害調査は5月に計画していましたが、雨天予報で、行動することはできても、記録を取ったりすることは難しいだろうという判断で延期にしました。そこで3つの行事を一緒に行うことになったという経過です。

最初に害虫被害調査。パラダイスゲレンデ終点の駐車場で支度を整え、30分弱、ゲレンデを登る。目指すはゲレンデの標識(80番と89番)の地点。標高は1550mちよつとのところ。前回(一昨年)と同じ2か所での調査。森林学のスペシャリストの野堀会員の選定である。調査内容、結果については、野堀さんの報告記録を次のページに掲載しております。



朝方の濃い霧のせいで木々は露を帯びているが、注意深く前回調べたアオモリトドマツの標本僕を探し出す。笹藪をかき分けで進むのは、濡れた笹が顔に当たったり、足元が滑ったりで結構難儀である。目当ての樹木を探し出し、この2年間の変化(成長したか、枯れたなど)を大声で伝え、それを記録係が記録する。地道な作業である。2年ごとに記録を5回ぐらい重ねれば、この森林が再生、回復に向かっているのか、枯死に向かっているのかがわかるという。

2か所の調査を終え、リフト乗り場までごみ拾いをしながら下ったが、ほぼ手ぶら状態。ここ数年蔵王で清掃活動をおこなっているが、ごみはほとんど見当たらない。結構なことであるが、清掃登山については検討が必要なのかなと思う。リフト乗り場のウッドデッキで昼食・休憩。夏場のリフト乗り場は絶好の休憩場所である。その後山形山岳会の山小屋に移動。そこで芋煮会となる。山形山岳会の山小屋は三五郎小屋の裏手にある2階建の山小屋である。會田会員が山形山岳会の会長であり、そのご縁でお借りしている。年に一度は利用させてもらっている。

芋煮会の前に佐藤明会委員による道智道の調査結果をまとめた成果を報告してもらった。佐藤会員を誘って2度歩いたのが縁で、大変興味をもち、独自に調べてまとめられたもの。(その報告は特別寄稿という形で本支部報に掲載されている。)日本山岳会の古道120に選ばれている古道で、さまざまな理由から、完全には踏破できていないが、ていねいに調べられている。

山形の芋煮会というと、内陸風か庄内風かと格好の宴会話のネタになるが、今回は、米沢の沼部さんがつくってくれた米沢風芋煮。おいしくいただきました。皆さんが持ってきてくれたさまざまなお酒も相まって、楽しくにぎやかな会でした。



蔵王地蔵山害虫被害調査報告

会員番号 15137 野堀嘉裕

2023年5月に蔵王地蔵山ザンゲ坂のパラダイスゲレンデリフト降り場付近の標識番号80番と89番の2か所を起点として調査地を設定し毎木調査を開始した。80番調査地は標識の南方で林道から約3mの法面を登った上部にあり、標識ポールを起点として南東方向に20m、その両側2mを範囲とする帯状調査地である。89番調査地は標識から約2mの法面を登った上部にあり、標識ポールを起点として南方向に20m、その両側2mを範囲とする帯状調査地である。今回(2025年度)は8月31日に同じ場所を再調査し、個体の消長を比較することとした。地蔵山全域の被害範囲は蔵王ロープウェイ地蔵山頂線山頂駅付近を上端として2015年から2018年にかけて拡大したことがわかっている。2023年5月の調査時点ではパラダイスゲレンデリフト降り場付近の標識番号80番付近、2025年8月時点では標高1493m付近まで降下しており、被害範囲が低標高域に拡大していることがわかった。

80番調査地では基点から20m南側で終点付近のイチイとアオモリトドマツ更新木の位置が逆転して記載されていることがわかった。またこのアオモリトドマツにはピンクテープがつけられていた。アオモリトドマツ更新木の2024年と2025年の樹高成長は毎年10cm程度であることがわかった。89番調査地では、調査基点左側のアオモリトドマツ枯死木の位置が左右逆であること、調査終点付近のイチイの位置が4m程基点よりであることがわかった。また8番のアオモリトドマツ更新木は消失しており枯死した可能性が高い。7番のアオモリトドマツ更新木の樹高成長は2024年2025年でそれぞれ10cmと30cmとなっていたことがわかった。2023年及び2025年の調査で個体位置が確定した。

調査地設定から2年しか経過していないが、あえて将来予測をしてみよう。現在樹氷を形成しているアオモリトドマツ枯死木は両調査地で9本あるが倒壊したものは1本もなかった。枯木に付く樹氷ははしばらく維持されると思われた。アオモリトドマツ更新木は5本あったが1本が消失した。新たな更新木は発見できなかった。残ったもののうち梢端が折れて成長が阻害されたものが1個体あった。それ以外の樹高成長は5cmから30cmであった。単純計算では毎年9.4cmの樹高成長となる。環境温暖化や気象害などを度外視し、仮にこの成長が継続すると仮定すると10年で94cm(約1m)の樹高成長が望める。アオモリトドマツ更新木の平均樹高は1.7mなので、樹氷が形成される樹高の5mに達するまでには33年が必要と試算された。この推定はあくまで2年間の情報を基にしたものであり確証に基づくものとはいえない。今後の継続調査が必要であることはいうまでもない。ちなみに、猛烈なササ藪を乗り越えて個体の調査を実践していただいた山形支部のメンバー各位に心から感謝します。ありがとうございました。



2025 9/13-14 宮城・山形支部交流会

会員番号 16798 沼部 ひろみ

今回は宮城支部主催、遠刈田温泉ペンション・レインボーヒルズで開催されました。宮城支部は八尾支部長含め6名。山形支部は初日の交流会と講演会に鈴木支部長・日向事務局長・沼部貞治・沼部ひろみ、4名が参加。翌9/14の山行に武田幹男・丹野浩之2名が加わり合計12名で蔵王古道を歩いてきました。

9/13(土) 午後3時に集合・受付をし、宮城支部の渡邊典男会員の講演「蔵王古道 歴史と現在」をお聞きしました。日本独自の宗教「修験道」山伏達が大切にしている信仰の証「蔵王権現」を平安時代山頂に祀る修験の道として開かれた蔵王。江戸時代に入り願いが叶うとして多くの人々が登った蔵王古道。そして遠刈田温泉から刈田岳の刈田嶺神社奥宮に至る参拝路の復活と維持管理を蔵王古道の会で活動しているなど。知れば知るほど時代と地域の「修験道」の関係は興味深い内容でした。

夕食と共に交流会が始まり、ペンション自慢の料理の品々（中華料理）をいただく。宮城支部の皆さんと和気あいあい話が弾み、楽しい夜は続くのでありました。

9/14(日) 朝食後、宮城蔵王すみかわスキー場へ移動し、入口の看板から刈田岳を目指します。整備された歩きやすい道を渡邊会員の説明を聞きながら、前日の講演でお聞きしたので不思議と「修験道」を歩いている実感が湧いてきました。『六根清浄』を全員で唱え、賽の河原・三途の川を渡り、刈田岳山頂に建つ奥宮を参拝し、徳が得られた気がしました。季節は秋、宮城県側からの蔵王古道は太古の時代から噴火を繰り返し自然の畏怖が創り上げてきた荒涼とした山肌にガンコウランの実やシラタマノキが色を添えておりました。



それぞれの上高地

会員番号 15785 佐藤一広

1. 期 日 2025年10月8日(水)～10日(金) 2泊3日
2. 目 的 「それぞれの上高地」の名付け親である元事務局長の長岡伸恭氏を記念し、上高地の日本山岳会山岳研究所を起点とした各々の山行及び散策。上高地周辺を楽しむ。
3. 宿泊先 日本山岳会山岳研究所 長野県松本市安曇上高地 4469-1

<参加者の一言>

杉田和美

上高地から見上げる山々は、紅葉が進み華いでいました。登らないつもりでいましたが、紅葉を間近で感じたいと岳沢小屋まで登る事に。紅葉は素晴らしく贅沢な時間を過ごす事が出来ました。

松本賀都子

不思議なご縁を頂き、ゲスト参加させていただいた、京多摩支部の松本賀都子と申します。「感想は？」と聞かれたら「楽しかった!!」の一言です。山形支部のみなさまのお陰です。ご飯も、おしゃべりも、お酒タイムもみ～んな楽しかったです。ありがとうございました。また、これからもよろしくお願いします。

安井康夫

岳沢小屋を往復しました。三日間晴れてよかったです。岳沢は紅葉もよく、感激です。登山中すれちがった登山者は7割は外国人でした。

梅本幸巳

山研の小屋は、上高地にマッチした外観、内観でした。梓川添いに下りながら、穂高連峰をながめ、朝は上にガスがかかっていたがその後ピークが現れ、きたかいがありました。帝国ホテルでコーヒセット(2500円)をいただきリッチな気分、上高地温泉ホテルで入浴後昼食、昼寝満足。

日向稔也

私は初めての焼岳にチャレンジ。思いきり足を動かし思い切り地面をふみしめ、登りました。思いきり疲れしました。久しぶりに山の疲れです。

結城敏宏

台風22号の接近で天候が心配された今回の上高地行でしたが今日9日は最高の天候に恵まれました。にもかかわらず、目指す奥穂までは届かずじまい。初めての重太郎新道の急登にやられました。それでも最高の紅葉のタイミングで朝早くのぼったことで雲海に浮かぶ乗鞍と焼岳の姿が最高でした。

沼部ひろみ

今年の紅葉は近年になく素晴らしい出来となっているとか..... 岳沢小屋で穂高の峰々を眺めに行ってきました。台風も外れ、ガスも上がり迫力の山並みに圧倒されました。

沼部貞治

寝不足と二日酔いのおかげで辛い上りとなりました。岳沢小屋で、30分休憩し復活し下山しました。

佐藤一広

美味しい鍋とお酒と、山田さん歓迎の青春の歌 少しやりすぎたかと思いましたが、翌日は爽やかな目覚めでした。梓川の散策、帝国ホテルのコーヒー、温泉、周りを取り囲む絶景。豊かな一日を体験できました。



ふたつの講演と月山高清水コース

2025 年度日本山岳会山形支部晩餐会報告

会員番号 9595 粕谷俊矩

今年度の支部晩餐会は 11 月 1 日、土曜日西川町志津の清水屋旅館を会場に行われた。志津は 1950 年に山形支部が発足した記念すべき土地である。(会場はほてい屋だった) 当日は雨。午後 3 時過ぎから三々五々集合、入浴。晩餐会に先立って、元日本山岳会会長で支部会友である小林政志氏の講演をお聞きした。演題は「私と日本山岳会」。小樽出身(1949)の小林氏は中央大学山岳部を経て、72 年に中央大学アピ登山隊に参加、75 年日本山岳会入会、翌 76 年日本山岳会ナンダデヴィ縦走登山隊に参加、主峰 7816m から東峰 7434m の初縦走に貢献した(『ナンダ・デヴィ縦走 1976』日本山岳会ナンダ・デヴィ登山隊編 茗溪堂)。2015 年日本山岳会会長就任し、その間、準会員制度を発足させ、創立 120 周年記念行事、古道調査プロジェクト、グレート・ヒマラヤ・キャンプなどの大きな事業を主宰された。2019 年に会長を退任し、夫人の実家がある鶴岡市に移住し、22 年に山形支部の会友とられた。小林氏は山形支部事業の一つである「学校から見える山」プロジェクトを高く評価し、その継続を強調された。

晩餐会では参加者全員が山への想いを語り、清水屋の山菜料理と自家製の濁り酒を堪能した。また恒例の山岳図書のオークションでは後藤彰会員が今年も多くの山岳図書を提供してくれたおかげで、会員は信じられない値段で貴重な本を入手できた。また高村真司氏提供の山道具、衣類等のオークションも会員に喜ばれた。後藤会員、高村会員に感謝したい。

翌 11 月 2 日、朝食後各自の車で本道寺の口の宮湯殿山神社に移動、本殿を参拝したあと、地元本道寺在住の地域史研究者山内善信氏から、湯殿山神社内の文化財と湯殿山参拝路である高清水通りについてのレクチャーをいただいた。真言宗寺院本道寺が明治政府の神仏分離令によって神社となり、仏具、仏像が離散したが、のちに本道寺住民の熱意が実り、空海像を買い戻したいきさつなど、興味深い話を伺った。レクチャーの後で神社の南東にある大黒森の墓石群遺跡を見学した。ここでは本道寺の僧籍にあった方々の墓石がことごとく倒され、土に埋もれ、木々の根が絡まっていたもの掘り起こし復元する作業を、大黒森プロジェクト・チームが 10 年以上も続けているという報告があった。

レクチャーの後で車に分乗し、登山口から十三丁目に当たる夫婦清水まで移動、ここから約 1 時間半、丁目石を数えながら登り、風吹(かざほこ)反射板跡の分岐点で

昼食休憩。ここから急な作業道路を下山。車道にでた途端予報通り雨となる。しかしナラ枯れについたムキタケやナメコを見過ごすわけにはゆかない。本道寺湯殿山神社の駐車場に集合し、閉会式後 14 時に解散した。

高清水通りとは本道寺から標高 1280m の高清水小屋跡までの九十六丁（1 丁は 60 間、109m）をさす。一丁毎に 9 6 体の丁目石が巡礼者の目印として配置されたことが分かっているが、そのうち 30 体が確認されており、66 体は未確認である。丁目石には寄進者の名前がその村名、寄進年と共に刻まれている。亡くなった家族の冥福と現世の家族の平安を願ったもので、歴史的にも貴重なものである。今後の更なる発掘そして発見が期待される。なお高清水通りを登った行者たちは標高 1700m の等高線沿いの横道を通して金姥を經由し、さらに装束場から湯殿山御秘所を目ざした。この高清水通りから金姥にいたる横道は、1970 年代初期まではなんとか通れたらしいが、現在は完全な廃道になっている。前述の大黒森プロジェクト・チームはこの横道の復元も模索している。今回は講演と現地でのレクチャーと月山古道の一つである高清水通りを歩くという、アカデミックな晚餐会であった。なお今後機会があれば、ほとんど人通りのない高清水通りから月山山頂までのロングコースを歩きたいものである。

参加者（順不同・敬称略）鈴木理夫 河口昭俊 野堀嘉裕 後藤彰 木村喜代志
高村真司 武田幹男 佐藤一広 池田正道 工藤正年 日向稔也 沼部貞治
沼部ひろみ 丹野浩之 神戸佳子 結城敏弘 小林政志 田辺信行 小野寺喜一郎

（以上 19 名）



『樹氷原を滑る会』 蔵王温泉スキー場

会員番号 17160 会友 松本賀都子

1日目(1/15) 早朝、支部会友先輩の安井さんの車に杉田さんとともに乗せていただき蔵王温泉へ向かいました。10時半に到着すると直ぐにスキー開始です。お天気は鈍より曇り空。蔵王のゲレンデが初めてのわたしが迷子にならないように木村さんが一緒に滑って下さいました。「上で食べると高いので」ということで、昼食は宿泊するエコハウスに戻り食べました。確かにラーメンが700円ですから、今時のスキー場価格としては安いと思います。午後からは前泊している人たちと一緒に上の台ゲレンデと竜山ゲレンデを滑りました。

「そろそろ上がりましょう」ということで15時少し前に宿に戻りました。16時の受付開始までまだ少し時間があります。「それでは温泉に行きましょう」と、歩いて5〜7分程の所にある上湯共同浴場に行きました。お湯はやや青みがかっていて硫黄の香りも微かにします。

宿の夕飯は「ジンギスカン」、お肉が柔らかくて美味しかった。これで一泊8,000円、お値打ちです。たらふく食べ飲み、懇親会も大いに盛り上がりました。

2日目(1/16) 朝から風も強く降雪です。滑りに自信のないわたしを気遣ってくださり、山形支部のみなさんの温かさをつくづく感じる一日となりました。この日はスカイケーブルで上り、中央ゲレンデ周辺を滑りました。晩ご飯は「豚しゃぶ」、お腹いっぱいいただきました。

3日目(1/17) 朝食後の解散式でとても嬉しいことがありました。それは、予算より安くあがったということで3,000円のキャッシュバックがあったことです。お宿のご厚意でビール代をかなりサービスしていただいたとのこと、感謝、感謝。

滑らないで帰る人、もう少し滑ってから帰る人、それぞれが思う存分楽しい時間を過ごし大満足で帰路につきました。鈴木支部長はじめ参加されたみなさん、大変お世話になりました。またよろしくお願いします。



追悼 前田直己氏（会員番号 10217）

会員番号 15137 野堀嘉裕

支部会員の前田直己氏が令和7年8月13日朝にご逝去されました。マエタテクノロジーリサーチファンドを通じて本支部の「学校から見える山」の活動に多大のご支援をいただきました。ご逝去を痛みますとともに感謝の言葉を申し上げます。

私が前田さんに最初にお目にかかったのは平成23年11月に開催された山形大学農学部地域連携推進協議会の席だったと記憶しています。名刺交換の時に私の名刺の写真をご覧になり「君は山スキーをするのかい」と聞かれ「3月の月山姥ヶ岳で滑っています」と答えると、おもむろに日本山岳会の会員証を見せていただきました。それまで大学や地域の山岳会メンバーにお目にかかったことはありませんでしたが、日本山岳会の会員の方と対面したことがなかったので大変驚きました。山の話がされる中で、深田久弥の日本百名山を踏破されたことを聞きました。こんな身近に山岳会の猛者がいらっしゃることに大いに感激したことを覚えています。そして、山岳会へ入会の意向があるなら支部長に紹介するよといわれました。次年度の協議会の席で入会の手続きをお願いした経緯があります。その後、鶴岡高専の佐藤先生らとの共同研究による簡易製炭技術開発、クロマツ林内に自生するショウロ(トリュフ)の研究、出羽三山でみられるブロッケン現象(来迎)の研究など議論を交わしました。私が支部長となったころ、冒頭にも記した「学校から見える山」の活動にご支援をいただくようになりました。この活動は大きく進展し現在も継続する事業となり日本山岳会本部だけでなく多くの山岳を愛する方々から支持されています。



お別れの会の遺影から引用

ここで前田さんの経歴を紹介します。昭和20年、山形県生まれ。早稲田大学卒。東北大学大学院博士課程修了。前田製管株式会社取締役社長、取締役会長、相談役を歴任。平成20年、酒田「小さな親切」の会代表に就任。その他、山形大学農学部客員教授、鶴岡工業高等専門学校客員教授等を務める。平成11年に酒田法人会会長に就任され、平成24年には公益社団法人化を成し遂げ、講演会や研修会を定期的に行うなど税知識の普及、納税意識の高揚に努められました。また、「小さな親切」運動本部の酒田支部の設立に尽力され、平成21年には会長に就任。清掃ボランティア、老人ホームへの車椅子の贈呈、小学校への図書寄贈など幅広く公益活動に尽力されました。さらに産業振興と研究開発に対する支援や人材育成への資金助成を行っております。公共的な活動に尽力されたことにより産業振興や市民生活の向上に大きく貢献されました。

平成元年：アントレプレーナー選手権優秀賞受賞、平成30年：山形県産業賞受賞、酒田市民功労賞受賞、令和元年：旭日双光章受賞。凄い経歴の支部会員がいらっしゃいました。

仕事の話がされる時はいつも大変厳しい言葉の使われ方をされるなかで、ご息子さんのことに関して目は細めて自慢げに話をされていました。

前田さんが山の話がされるときはいつも遥かな白い山々を眺めるような眼をしていたことを思い出します。心からご冥福をお祈り申し上げます。

会員番号 12023 石山正典会員が、2025(令和7)年6月7日ご逝去なされました。ご生前のご指導ご交誼に感謝し、心よりご冥福をお祈りいたします。(事務局)

特別寄稿

雲南紀行

会員番号 7734 木村 喜代志

はじめに

新型コロナウイルス感染拡大で鳴かず飛ばずの3年間を強いられた。この長い長い期間中、旅をしたい所はそのままだったが、行けない理由が増えていた。3年の間に身近にいろんな変化があった。最も大きいことは、何とんでも80代後半の身にとっては体力の衰えである。若い時のように予測できる1年後ではなくなってしまった。友が去り、兄弟が去り、心に大きな空洞ができた。これらが静かに、確実に行動を億劫にさせていた。同時に、日常生活から離れた場所への適応能力、旅先での現地の人々との語らいなど、年齢からくる不安もあった。

旅先を考え始めた時、北極圏、東ヨーロッパと並んで中国南西部の雲南省をリストアップした。雲南省への興味関心は、まだ外国に気楽に出て行けない頃に読んだ一冊の本、「照葉樹林文化論」(中尾 佐助著)であった。

幸い、旅で味わった新しい感覚との出会いや固定観念を覆す力にも心が動いていた。そして、じっと耐えた3年という時間が、気楽に旅を繰り返していた時には見えなかったものに気づかせてくれそうにも思っていた。これまでの旅の形態を変えれば、年相応の旅ができそうな気にもなった。何よりも直ぐにでも行きたい場所、国があった。そして一緒にいたい仲間がいた。

<中国社会の変貌>

かつての中国は、「世界の工場」として第二次産業が経済を引っばってきたが、2012年に第三次産業の比率が第二次産業を追い越し、2015年には50%を超えた。1978年の改革・開放政策を経て1990年以降、世界で類を見ない高度経済成長と発展を遂げ、社会主義市場経済体制でアメリカに次ぐ世界第2位の経済規模になった。

チベットを除く中国の旅は、2005年に東チベットでの登山後、川蔵公道を通過して四川省成都に入り、九寨溝と都江堰を回った。2007年に万里長城の金山嶺・司馬台を歩き、北京の胡同を巡った。2011年は北京発ウランバートル経由モスクワ行の「モンゴル縦貫鉄道」、通称「裏シベリア鉄道」に乗る前に北京から訪れた慕田峪長城の3回である。この時にインプットされた中国像と今回の中国はあまりにも違っていた。

*キャッシュレス普及

中国のキャッシュレス普及の背景に、最も高額紙幣が100人民元(¥2,180 '25/11)で、大金の持ち運びが難しかったことに加えて、日常的に存在する「偽札」問題が現金に対する信用低下を招いていたという。中国では100人民元紙幣を受け取る時は警戒するので、両替の時はなるべくそれ以外の紙幣、50、20、10元にするようにとの業者からのアドバイスがあった。道路沿いの露店など以外は全てキャッシュレス社会であった。

中国のモバイル決済普及率は韓国の95.3%に次いで世界2で83.8%(2021)だという。ホテルでランドリーの支払いを現金でしたらフロントに釣銭の用意がなくマネージャー室まで走る始末だった。また、聞くところによると、旧暦の正月にあたる春節のお年玉までも赤い封筒での手渡しからキャッシュレスが主流になったという。政府による積極的な後押しもあり、社会全体が電子決済が前提となっていた。それに伴いこれまでの偽札からデジタル詐欺という新たな問題が出始めているという。

*電気自動車の普及

中国は、20世紀末から大気汚染が劇的に悪化し、少し遅れて肺ガンも上昇し始めた。2007年金山嶺に向かう時、早朝の北京はどんよりと曇ったように霞んでいた。改革・開放政策以降の経済発展優先、車の急激な増加に加え、道路整備が間に合わず交通渋滞による排ガス、エネルギー源の約75%が石炭という高い石炭依存度な

どにより大気中に漂う微小粒子、PM2.5が人体への悪影響が指摘されるようになった。加えて、中国の男子の喫煙率53%、3億5千万人で世界最大のタバコ消費国である。2021年WHO推定によると、世界の肺ガン発症数182万人、うち中国が65万人で約36%を占めている。

2010年代になると国主導による環境対策が半ば強引に進められるようになった。具体的には工場の郊外への移転、自動車の排ガス規制、電動化などである。中国の街中を走る乗用車を見ていると青と緑の2種類のナンバープレートがあった。青がガソリン車で、緑が電気車と色分けされていた。また、大型車の黄のプレートはガソリン車だという。



電気自動車（EV）普及率を見ると2018～2020年の3年間は5%、2021年には15%、22年は29%、23年は38%、24年は48%と急激に普及し初めている。勿論、その裏には政府による税の優遇や補助金などの強引な手だてが後押ししている。そして、2030年までには新車販売のガソリン車は全てハイブリット車（HV）とし、ガソリン車は市場から排除されるという。国主導による強硬策を可能にしているのが他でもない国の政治体制である。



(画像はパソコンからのコピー)

*高速鉄道

中国の高速鉄道は、1978年に来日した鄧小平氏が新幹線の快適さに感動し、その必要性を痛感して高速鉄道の建設が始まったと言われている。

今回、昆明～大理、麗江～昆明、昆明南～懷化南、(乗換) 懷化南～鳳凰と4回高速鉄道（China Railway High speed = CRH）を利用した。高速鉄道は2024年現在、営業距離48,000kmで、人口50万人以上の都市中96%を網羅しているという。2025年末には5万kmを越えた。2008年、最初に高速鉄道が走ってから20年弱の期間で地球1.2周である。そして、2030年までに60,000kmを目指しているというから国土を縦横無尽にCRHが走り抜けているのが今の中国である。なお、運行最高時速は350kmで世界最速である。

チケットは業者を通して購入済みで、「D8672 3号車 03A」のように列車番号、車両番号と座席番号が記入されたeチケットが送信されてきた。第1関門は列車番号を告げ、パスポート提示。荷物のX線検査である。次は、その奥の電光掲示板に現れる列車番号を確認し、該当改札口に向かう。改札口前にはイスが並んでいた。

発車15～20分前に改札が始まると同時に長蛇の列ができた。中国人用ゲートは全自動チェックでスムーズに流れる。中国人スタッフのいる外国人用の改札口に進み、パスポートを提示し、本人確認を済ませてからプラットフォームに向かう。さらに、目的駅に着いたら外国人専用ゲートでパスポートチェックを受ける。外国人の動きが一部始終監視されている感じで、世界有数の監視社会を実感する。



駅舎は大きく立派 (画像はパソコンからのコピー)

なお、高速鉄道は「翼のない飛行機」と揶揄されているという。出発地から到着地までは速い。しかし、駅は市街地から遠く車で40分～1時間で、ようやくたどり着く感じ。降りてから目的地までも同じである。途中で乗り換えとなると更に時間がかかる。目的地までの通しの切符は駄目で、乗り換え駅で一度改札口を出て、新たな切符で乗車となる。セキュリティの関係からホームに留まることは許されないという。

車内は日本の新幹線と何処となく似ており、乗り心地は満足だった。そして、日本並みの時刻表通りの運行であった。車窓からの景色で気になったのが、何処の町にも不釣り合いの高層の集合住宅が林立し、高速鉄道

や高速道路の直ぐ脇に、脳裏にインプットされているかつての中国の風景が、切り取りされたように残っていた。とにかく、中国はここ数年で凄まじい勢いで変化する様子が読み取れた。

*街の奇麗さと治安

中国は空前の旅行ブームだという。この度まわった雲南省と湖南省の観光地は、何処も肩が触れ合うほどの混み様だった。でも、至る所にゴミが散乱…は前の話であった。どこにも箒と塵取りを持った複数人の清掃人の姿があり、ゴミ箱が設置されており、警告の立札が建っていた。彼ら、彼女らの努力があって観光地の美化が保たれている感じがした。例えば、タバコのポイ捨てを何度か目にした。靴で火をもみ消してお終いである。同じことがレストランや食堂でも同じである。食事を終えたテーブルを見ると、客が中国人か外国人だったかが直ぐにわかる。



武陵源で見かけたゴミ箱

街の裏通りや小路でもまめに清掃に勤しむ姿を何度か目撃した。目を背けたいくなるゴミ散乱の光景には出くわさなかった。大声での会話と電話、くわえタバコなど気になること多々あったが、全体として治安は安定していた。

街の奇麗さは同時に治安の向上にも繋がっている印象を受けた。聞くところによると、世界の監視カメラの半分が中国に設置されているという。監視カメラの普及に比例してスリ、置き引きなどの犯罪が激減したという。

<茶馬古道>

中国の民族は50余で、その半分が雲南省で暮らしている。しかもそのうちの15民族は雲南省のみで見られる。雲南省は中国の南西部に位置し、東南アジアのベトナム、ラオス、ミャンマーと国境を接している。面積は日本より広く、その90%以上が山地である。北部は寒冷なチベット高原、南部のラオスでは熱帯雨林がみられる。この変化に富んだ地域が、起伏の激しい地形によって各民族の独立性を保つことを可能にし、独自の文化保持に役立ってきたのだろう。

省都昆明から高速鉄道でペー（白）族による王国だった大理に移動した。ここは古来から東は昆明、南西にはミャンマー、北はチベットへと通じる交通の要衝であった。1泊して蒼山を背景にした大理古城とランドマーク的存在の三塔寺を回った。翌日、チャーターした車でペー（白）族の街、白壁と青瓦の建築物を眺め、絞り染の街、周城で買い物をしながら200km、標高2,400mのナシ（納西）族の街、麗江に移動した。

街は旧市街と新市街にはっきりと区別されていた。目指すは旧市街の中心部、四方街である。ひと際大きい公的な建物、銀行、レストラン、ホテルなどなどが立ち並び整備された大通りの新市街は近代的な街であったが、一歩旧市街に入ると擦り減った石畳の光沢が長い歴史を語りかけていた。木目が浮き出た2階建て、3階建ての建物が軒を連ねている。車は姿を消し、歩く人々の動きもどこかゆったりしていた。二つの別世界が隣り合っているのが不思議である。

旧市街の背後にある獅子山公園に向かった。狭くかなりの坂道だが、両側は小奇麗な土産物店、茶店などが軒を連ねていた。麗江の街は、北側に聳える玉龍雪山（5,596m）の懷に抱かれていた。見下ろす建物の屋根は濃い灰色の瓦葺で覆い尽くされていた。



氷河を抱く玉龍雪山の姿は圧倒的な存在で、ナシ族にとって聖なる山、守り神の神々しさに満ちていた。この山から流れ出る雪解け水を利用して、街中に水路を引き 12 世紀から今日に至るまでの 800 年間、チベットとの茶馬交易の中継地として栄えてきた街である。

20 数年前発行の雲南省関係の資料を見て、旧市街の中心地、四方街でのんびり 2~3 日過ごせないものかと考えていたが、仲立ちしてくれた業者によると、中国は空前の旅行ブームで観光客が溢れており、人酔いする程の混雑ぶりだという。獅子山公園の行き帰りは縁日のような人混みの中だった。

水路と石橋の美しい旧市街地の一角に構える茶店に入った。街の喧騒とは無縁の落ち着いたところで、プー



アル茶の香りが店内一杯に漂っていた。年配の女性が慣れた手つきで直径 20 cm、厚さ 2~3 cm の円盤状に固められたプーアル茶葉を小分けにしていた。その奥で凛とした中年の女性が洗練された所作でプーアル茶を淹れてくれた。「チャをどうぞ!」、「日本に旅行で 2 度行ったことがある」以外の言葉はなかったが、温もりが十分に伝わってきた。

プーアル茶といえば、ウーロン茶と並んで中国茶を代表する茶で日本でも広く知られている。茶葉を方形やドーナ

ッツ型、円形や円錐形などに固めて、麴カビで発酵させた茶である。歴史は古く雲南茶の名称で唐の時代の記録に残っているという。後年、普洱（プーアル）がこの茶の集散地となったことからプーアル茶となったというから茶葉の銘柄ではない。

この茶が野菜や果物の少ないチベットに運ばれ、ヤクの乳で作られたギー、粗製バターを溶かしたバター茶として 1 日何杯も飲まれている。チベットを初めチベット仏教圏で何回かいただく機会があった。何処かで動物の匂いを感じるが、慣れると気にならなくなり、何回もお代わりした。なお、雲南省から運ばれた交易品は、プーアル茶の外に塩、銀製品、食料品、布製品、日用品などで、チベットからは馬をはじめ毛織物、薬草、毛皮などであったという。

茶馬古道は、茶の産地から集散地の普洱を出て大理、麗江、シャングリラ*（香格里拉）を経てホントワン（横断）山脈の間を縫ってチベットに入る雲南路（シャンバラ・ロード）、雲南省



から四川省成都に入り多くの山脈と河川を越えてチベットに至る四川路（カンゼ・ロード）、今日の「川蔵公道」の元となったルートに大きくまとめられる。更にチベットからはネパールへ、インドへと延びていたことから古代中国と南アジアとの重要な交易路であったといえる。記録によると7世紀の唐の時代にすでに始まっており、清の時代に流通の絶頂期を迎え、四川省とチベットを結ぶこの川蔵公道、車道が開通する1958年まで続いたというから優に1,000数百年間の歴史を刻んだことになる。

茶の歴史は古い。原産地は雲南省南西部の山中とされ、紀元前10世紀、周の代に薬用として、2世紀の三国時代に嗜好品とされ始め、8世紀の唐の代には栽培、製茶が普及したとされている。茶は雲南地方から世界に広まっていくが陸路の場合は「チャ」、「チャイ」でチベット、モンゴル、ロシア、インドからイスラム圏を経由してトルコ、ギリシャへと広まった。「チャ」や「チャイ」の名称の外にもトルコ語の「チャイハネ」、寄合茶屋がイスラム圏で広く普及している。そして、インドのチャイは紅茶の細かい茶葉を湯とミルクで煮出し、ジンジャーやシナモン、カルダモンなどのスパイ



スが入るマッサラチャイに、トルコではミルクやスパイスは入らずストレートで飲むのが基本で、中央部がくびれたガラスの小型のコップに角砂糖を3~4固入れたのに濃く煮出した茶を注ぎ、上澄みだけをちびりちびりと何杯も飲む。ロシアではジャムをスプーンで口にしながら濃い目に抽出した紅茶を飲む。このように同じチャ、チャイでも地域の生活文化に溶け込み独自の茶文化へと変化して定着している。今日の中国、中央アジア、西アジア、ヨーロッパを結ぶ古代通商路、いわゆるシルクロードのシルクのように一般住民からかけ離れたものと違い、市民生活に溶け込んだ茶はゆっくりとながらも着実に地元根付きながらアジア、ロシアへと広まり、ヨーロッパで海洋ルートで伝播した”tea”文化と合流したのだろう。

1999年、オランダ人2名、イタリア人と日本人の4名でカトマンズから陸路でラサを目指したことがあった。荒漠とした無機質の5,000m級の峠を4つ越え、その彼方に聳える氷雪の山に見入った。道路名は”Friendship Highway”だが、増水で道型が消えたところもあり、一日の走行距離が20数kmの日もあった。途中立ち寄った幾つかの集落、チベット仏教寺院では19~20世紀にかけて清朝とチベット進出を狙うイギリスと帝政ロシアとの角逐の舞台であったことが思い浮かんだが、その遙か昔からの茶馬古道の延長の交易路であったことまでは想い巡らなかった。また、2005年、ラサから東チベットのカンリガルポ山群フスコンダ山のスキー登山を試みたことがあった。登山行動中に公安と村長がベースキャンプに来て隊の行動範囲や目的を尋ねに来たことを登山終了後に知った。思えば、ダライラマ14世がインドへの亡命ルート山域での山行であった。その帰路、川蔵公道を通り成都に出た。ここは茶馬古道を基に切り開かれた公道で、遙かなる古道に終焉を告げた道でもあった。

*シャングリラ (Shangri-La) イギリスの作家、ジェームズ・ヒルトンの「失われた地平線」(1933年出版)に出てくる理想郷(ユートピア)の名称。2002年雲南省中甸県がシャングリラ県に、2014年にシャングリラ市に改名

<資料>

- *ペー（白）族 チベット系の民族で、主に雲南省大理を中心に貴州省、湖南省などに分布。ペー族の歴史は古く独自の文化が発達している少数民族の一つ。67%の人々がペー語、残りは中国語を話す。未婚の女性が頭に巻く白い羽根飾りが特徴的で、民族名の由来になっている
- *ナシ（納西）族 主に雲南省北部、麗江地域に居住している。彼ら独特の言語であるナシ語を話す。象形文字であるトンパ文字と、自然現象をそのまま神として擬人化した「ジュ」との共存を説くトンパ教を中心とした文化が特徴。日本の山や巨木、滝などの自然物に神が宿ると考え、これを祀るのと同じ

<藍染めの里・周城>

周城は大理から北へ20数km。幹線道路から街の中に入ると石畳の道となり、小路の両脇は藍染め製品が風になびいていた。藍染めの薄い色は涼を呼び、見る者の心までも軽くなる感じだった。

周城は大理で最も大きなペー（白）族の集落で、彼らの生活文化が色濃く残る歴史の街だという。農耕や淡水湖洱海での漁業で生計を立ててきたが、多くの人々は藍染め作業と販売にも従事してきた藍染めの里である。

藍染めは世界各地で見られる染色方法で、原料の藍は人類最古の染料ともいわれ、人類の文明と共に発展してきたものだという。エジプトではミイラを包む布に用いられていたし、インドはインディゴ染料の主要な産地で、藍染めがインダス文明時代から行われていたことが知られている。中国では紀元前2,000年頃藍染めが始まり、その流れを今に受け継いでいるのが周城だという。日本には飛鳥時代に中国から朝鮮経由で伝わり、江戸時代に庶民の間に広まったことが知られている。

周城鎮（村）は古くから藍、タデ科の一年草のタデアイの産地で知られ、明代末から清代初めにかけて藍染めが始まり、民間伝統工芸品の地位まで高めたという。伝統的な手法は絞り染めで、図案のベースになっているものは梅と蝶と蜂であり、周城付近の自然の中に存在する生命や風景を愛でてそれを日常生活取り入れたことに由来していると聞いた。

絞り染めとは、染め出されるように布地を糸で縛って染料、アイの葉を水に浸して染料を抽出し木灰と石灰などを加えて発酵させた液に浸し、部分的に線や模様を染め出す方法である。染め上がったものは天日で乾かすことで藍色がより鮮明になるという。このお天道様頼みが自然と共存する人々の生活に息づいている。この作業を繰り返し藍色の濃淡で図案を仕上げるのだから労力と時間のかかる作業である。

小路の藍染め製品の間を通り、藍染工房兼販売店の門をくぐって中庭に入れてもらった。中庭は工房の一部で、数人の女性が布地を括っていた。染色現場を見る機会はなかったが、染色は主に男子の仕事だと聞いた。表



通りに面した店に裏手から入れてもらった。目に飛び込んできたのはいろいろな模様のテーブルクロス、ワンピースの数々、男女のシャツ類、ストール、ポーチ、ネクタイ、トートバックなどなど。高価なものは藍染めの織物や刺繍などが吊るされ、広げられ、積み重ねられていた。

製品を見ていると、藍染めの色の多さに驚かされた。薄い水色から深い紺色と一口に青と言っても実に多様であった。これは自然の中の多様な青を表現しているのだという。帰国してから調べてみたら、青色の濃淡によって美しい名称が付けられていた。最も薄いのが藍白（あいじろ）で白に近いごく淡い青、薄いのが甕覗（かめのぞき）で藍甕を覗いたような澄んだ水色、中間が浅葱（あさぎ）で少し緑がかった明るい青、濃いのが縹（はなだ）で鮮やかで一般的な藍色、最も濃いのが留紺（とめこん）で黒みがかった非常に深い紺色と、日本人の感性によって生まれた五段階に分けられていた。

広い店に山積みの中から購入品を選ぶの至難の業であった。真っ先に目に留まったものと、最も藍染らしい留紺のテーブルクロスを選択し記念品として買い求めた。

ところで、日本では藍染めの原料である藍は、昔から葉や種は解熱や解毒など薬草としても利用されてきた。また、藍染は生地糸を強くすることから暖簾や風呂敷、鎧兜の紐、剣道着のなどにも利用されてきた。さらには藍染めの布は耐火性優れていることから武士の甲冑の下着、江戸の火消用半纏など、多くの人々に幅広く愛用されてきたことが知られている。



<旅のデータ>

*旅行期間 2025/10/13～10/24

*旅行先 雲南省・湖北省 成田→(✈)→昆明→(高速鉄道)→大理(三塔寺・周城藍染工場・喜洲ペー族民居建築群・大理古城)→(車)→麗江(玉泉公園・束河古鎮・氷河公園4,500m・白沙纳西族村・虎跳峡)→(高速鉄道)→昆明(西山公園・雲南民俗村)→(高速鉄道)→懷化南(乗換)→(高速鉄道)→鳳凰→(シャトルバス)→鳳凰古鎮→(車)→芙蓉鎮(王村)→(車)→張家界(天子山風景区・袁家界景区・楊家界風景区・黃石寨風景区)→(✈)→南京→(✈)→成田

*旅行業者 西安中XIN信国際旅行社有限責任公司 高杉 功史

*メンバー 野堀嘉裕・武田幹男・鹿野実・木村喜代志

日本山岳会山形支部及び会員活動記録

2025（令和7）年4月～2026（令和8）年3月

事務局

2025年（令和7年）

4月2日（水）	2025年度支部総会資料づくり（街づくりスタジオ鶴岡）5名
4月5日（土）	2025年度日本山岳会山形支部総会（寒河江市文化センター）15名
4月18日（金）	事務引継ぎ（にこふる）3名
4月19日（土）	月山春スキー（姥ガ岳～ネーチャーセンター）8名
4月28日（月）	橋本会長によるヒアリング（zoom会議、支部長、事務局長）
5月17日（土）	蔵王害虫被害調査、雨天中止
5月20日（火）	第1回支部事務局会議（佐藤一広宅、羽黒）
5月31日（土）	支部連絡会議（zoom）
6月1日（土）	第1回支部役員会（寒河江市文化センター）
6月21～22日（土日）	山小舎探訪（鳥海山・鉾立・TDK東雲荘）11名
7月11～12日（金・土）	東北・北海道地区集会、北海道支部主催（洞爺湖有珠山ジオパーク、昭和新山）山形支部5名
7月28～30日（月～水）	それぞれの白馬（小谷村、立教山荘）9名
8月30～31日（土日）	公益清掃登山・芋煮会・蔵王害虫被害調査（蔵王、山形山岳会山小屋）13名
9月13～14日（土日）	宮城支部との交流会（宮城支部、宮城蔵王、ペンション・レインボーヒルズ、蔵王古道（宮城県側））山形支部6名
9月18日（木）	第2回支部事務局会（佐藤一広宅、羽黒）
9月26日（金）	第2回支部役員会（寒河江市文化センター）
10月8～10（水～金）	それぞれの上高地（上高地、日本山岳会登山研究所）9名
11月1～2日（土日）	支部晩餐会（志津、清水屋旅館、小林会友（元JAC会長）の講話、本道寺で山内義信氏の講話、本道寺周辺見学、月山高清水コース登山）20名
12月6日（土）	本部晩餐会兼日本山岳会創立120周年記念式典（東京・京王プラザホテル）田宮良一会員 永年表彰、6名出席（田宮、鈴木、武田、小林、田邊、杉田）
12月23日（火）	古道担当者会議（FOODEVER 鶴岡）4名

2026年（令和8年）

1月9日	古道担当者会議（FOODEVER 鶴岡）4名
1月28日（木）	第3回事務局会（鶴岡市第3学区コミュニティーセンター）
1月15～17日（木～土）	樹氷原を滑る会（蔵王温泉スキー場・エコハウス）16名
2月20日（金）	第3回役員会（寒河江市文化センター）
3月11～12日（木金）	天元台を滑る会（天元台スキー場、大笠山荘）10名（支部会員9名、米沢山の会高橋晃さん）

支部会員の活動記録・2025 年度

- 4月20日 佐藤一広会員の水墨画（作品名「北の峰々」）が日本水墨画主催の水墨画展で奨励賞を受賞
- 5月11日 寒河江山岳会創立25周年記念講演会（粕谷俊矩会員が実行委員長）。野口いずみ氏（東京多摩支部支部長）の講演。『元気に山を楽しもう』
- 5月27日 NHK テレビ山形「やままる」で、野堀嘉裕会員が山形百名山・秋葉山のガイド役で出演。山火事後の再生の紹介
- 5月10日 鈴木理夫支部長 庄内地区高校総体登山競技（金峯山）にて、「学校から見える山」を贈呈
- 6月17日 鈴木理夫支部長がJAC山形のライブラリーに「金峯山ミニ知識」を掲載
- 7月5日 野堀嘉裕会員 寒河江市主催の葉山公募登山に講師として参加。ブナの生態について野外講義
- 8月23日 野堀嘉裕会員 鶴岡市・羽黒山スギ並木保全とまちづくり協議会主催の「羽黒山スギ並木保全とまちづくり」にパネラーとして参加
- 9月8日 木村喜代志永年会員 「紀行文で綴る世界の地誌」をJAC山形のライブラリーに掲載
- 9月26日 工藤正年会員、寒河江山岳会長として山形新聞に「提言」を寄稿。「葉山の魅力を開発、発信」（寒河江山岳会創立25周年の活動報告）
- 10月13日（日）～10月24日（金）木村喜代志、鹿野実、野堀嘉裕、武田幹男各会員、中国 雲南省、湖北省の旅（張家界国家森林公园など）
- 2024年4月から 沼部ひろみ、沼部貞治、結城敏宏各会員 地元米沢地区のケーブルテレビ（NCV）の番組『足元の宝物』に出演し、地元の山の魅力を発信しています（ほぼ、毎日放送されています）。2025年は高ツムジ山、一念峰、霧の平、駱駝山、薬師森、豪士山、兜山、秋葉山などを紹介した。（エリア外の方はYouTubeで「NCV 地元の宝物」で検索するとカットシーンが閲覧できます。）
- 2026年2月27日 高村真司会員、『山形教育』2月刊（No.398）に「山を知る一山に学ぶ」を寄稿

<付記> これらの記録は、会員の皆さんからの情報提供を受け、支部の活動とは別に、会員の多様な活動・活躍を紹介したいという考えからまとめたものです。掲載の基準は特に設けていません。今後とも情報提供をよろしくお願いします。

編集後記

5年ぶりで支部報担当に復帰しました。編集は不得手な分野ですが、皆さんの協力により第21号の完成にこぎつけました。特に執筆者の皆さんは依頼に対して即快諾といった感じで、たいへん助かりました。さすがJAC山形支部です。

5年前に比べると、新型コロナ騒動を差し引いても、支部活動が活発になっていることがわかります。今後とも、安全登山を大前提に、魅力的な支部活動を続けていきたいと思います。

（支部報担当 河口昭俊）